平城宮跡資料館二〇一〇秋期特別展

天平びとの声をきく―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて　解説シート　付録

展示期間
Ⅰ　二〇一〇年　九月二五日(土)―一〇月一一日(月)
Ⅱ　一〇月一三日(水)―一〇月二五日(月)
Ⅲ　一〇月二七日(水)―一一月　七日(日)

【木簡が見つかった遺構】

（遺構番号順。年は展示木簡の出土年で、その遺構の全ての調査年を示すものではない）

SK二一九（3）　**重要文化財**　一九六一年

平城宮中央区の第一次大極殿院の跡地に建てられた西宮の北側に展開する役所のゴミ捨て穴。平城宮跡最初の木簡出土地として名高い。天平宝字末年頃（七六〇年代前半）の遺物を中心とする。この遺構出土の木簡群は、同じ役所内の井戸SE三一一出土の木簡とともに、平城宮跡大膳職推定地出土木簡として、二〇〇三年に木簡では初めて重要文化財に指定された。

SK八二〇（第二室4 5 6 7 8、第三室122 123、第四室172 177 180 196 197 198 199）　**重要文化財**　一九六三年

内裏の北東に位置する北外郭官衙西辺に掘られたゴミ捨て穴。七四五年の平城還都後のこの地域の再整備に関わるゴミを投棄した土坑で、七四七年（天平十九）頃に埋められたとみられる。平城宮跡で最初に千点規模の木簡群が見つかった遺構。平城宮跡内裏北外郭出土木簡として、二〇〇七年に重要文化財に指定されている。

SK二一〇一（第四室176）　**重要文化財**　一九六四年

内裏の真北に位置する役所のうち、東半の広場部分で見つかった密集するゴミ穴の一つ。周辺にはいくつものゴミ穴が重複して掘られ、井戸の南西側の作業場兼塵芥処理場のような様相を呈していた。そのいくつかから木簡が出土した。SK二一〇一は、東西三・五m、南北三・四mの方形を呈する。SK八七〇・SK二一〇二・SK二一〇七木簡とともに、平城宮跡内膳司推定地出土木簡として、二〇一〇年に重要文化財に指定された。

SK二一〇二（第四室207 208）　**重要文化財**　一九六四年

内裏の真北に位置する内膳司と推定される官衙のうち、東半の広場部分で見つかったゴミ穴密集地域のゴミ穴の一つ。SK二一〇一のすぐ北に位置する、東西三・八m、南北二・四m、深さ〇・三mの浅い穴である。SK八七〇・SK二一〇一・SK二一〇七木簡とともに、平城宮跡内膳司推定地出土木簡として、二〇一〇年に重要文化財に指定されている。

SD二七〇〇（第二室88、第三室167）　一九六五年

平城京の北東に位置する水上池の南西部に端を発し、内裏東辺を南流してその排水を集める基幹排水路。内裏東辺では石の護岸をもつが、それより南では一部に木杭による護岸がみられる程度となる。東区朝堂院・朝集殿院東辺の東方官衙のどこかの地点で東に折れ、SD三四一〇に接続していたとみられるが、その地点は未詳。内裏周辺では、天平期以降の多量の遺物が層位的に堆積していることが知られている。

SD三〇三五（第二室18 19 20 21 22、第四室174 178 183 184 185）　一九六五年

造酒司の井戸の排水を流すために役所の西辺に位置をずらしながら何度か掘られた南北溝の一つ。南端は造酒司南限の築地塀を暗渠で抜けて宮内道路の側溝に接続する、敷地内では奈良時代を通じて淀み状に広がり、ゴミも投棄されて湿地状を呈していたとみられる。

SD三一五四（第二室89、第四室186）　一九六五年

東院西辺北部を北東から南西に斜行して流れる素掘りの溝。幅二・四m、深さは約〇・四m。西端で素掘りの南北溝SD三一五五に接続し南流する。

ＳＡ三三六二（第二室87）　一九六五年

東院西辺の斜行溝ＳＤ三一五四の西に位置する東西棟建物ＳＢ三三二二の北を画する東西塀で、一〇間検出した。木簡は檜皮が充満した柱掘方から出土した。

ＳＤ三四一〇（第一室2、第三室141）　一九六五・六六年

ＳＤ三四一〇は、平城宮跡東院と東方官衙の間の宮内南北道路の西側溝。小子門以南は東面大垣内側（西側）に沿って流れる。141が出土したのは、東院西辺を流れる平城宮跡内の地点であり、上流の内裏方面から流れてきたか、東院に関係する可能性が考えられる。

ＳＤ三四一〇は、宮東南隅で西から東西溝ＳＤ四一〇〇を合わせたあと、南面大垣を暗渠で抜け、二条大路北側溝ＳＤ一二五〇に合流する。2が出土したのはこの付近である。二条大路北側溝ＳＤ一二五〇は、ＳＤ三四一〇を合わせたあとさらに東流し、東面大垣東側の東一坊大路西側溝ＳＤ四九五一に注ぎ込む。複数の溝が錯綜して流れるこの付近は、平城宮東部の排水が集まる地域であり、上流部から流れ下ってきたものも含まれる。したがって有数の木簡出土地になっている。

ＳＤ四一〇〇（第二室33 34 35 36 91 92 93 94 95 96 97、第三室143、第四室200 201 202 203 204 205）　一九六六年

平城宮東南隅の南面大垣内側を東に流れる東西溝。東面大垣内側の南北溝ＳＤ三四一〇に合流する。木簡は、式部省の勤務評定に関わる削屑が大半を占め、養老・神亀年間（七一七～七二九）から宝亀元年（七七〇）のものまでを含むが、養老・神亀年間のものは南面大垣を横断する南北溝ＳＤ一一六四〇と一連の遺物とみられ、ＳＤ四一〇〇の木簡は基本的に宝亀元年頃に一括して投棄されたものとみられる。なお、宝亀年間頃に北側に移転してきたとみられる神祇官に関わる木簡も、僅かではあるが含まれている。

ＳＤ四七五〇（第一室1、第二室45 46 47 48 49 50 51 52、第三室138 139 140 147、第四室173 187）　長屋王家木簡　一九八八・八九年

平城京左京三条二坊一・二・七・八坪で見つかった左大臣長屋王の邸宅のうち、八坪東南隅に東面築地塀の内側に沿って掘られた南北溝状のゴミ捨て土坑。総延長は約二七・三ｍ。平城遷都からまもない時期の、貴族の家政機関の資料という他に類例のない木簡が出土した。長屋王が式部卿を務めていた七一六年（霊亀二）後半の、邸内における米支給の伝票木簡を主体とする。

ＳＤ四九五一（第二室90、第三室120 131、第四室212）　一九六七年

東院西辺の排水を集める溝で、小子門の西側から宮外へ出て、東一坊大路の西側溝となる。二条大路北側で西から流れてくる二条大路北側溝ＳＤ一二五〇を合わせ、さらに京内を南流する。京内の道路側溝としては最も多くの木簡が出土しており、宮近辺だけでなく、七条でも千点規模の木簡の出土が知られる。

90は、小子門の脇を通って宮外へ流れ出た、平城宮東面の東一坊大路西側溝部分から出土した。120は、小子門北西の宮内部分から出土した。212は、二条大路北側溝ＳＤ一二五〇と合流して二条大路を横断し、南側溝ＳＤ四〇〇六と合流する付近から出土した。

ＳＤ五一〇〇（第三室121 132 166、第四室175 179 181 182 188 189 193 194 195 209）　二条大路木簡　一九八八・八九年

平城京左京三条二坊八坪（光明皇后宮。旧長屋王邸）と二条二坊五坪（藤原麻呂邸）の間の二条大路上の南北両端に掘られた濠状の遺構のうち、皇后宮の北門から八坪北辺築地塀に沿って二条大路南端に掘られた遺構。総延長約一二〇ｍ。

ＳＤ五三〇〇（第二室69 70 71 72 73 74、第三室142 144 145 146 148、第四室190 191 192 206 210 211）　二条大路木簡　一九八九年

平城京左京三条二坊八坪（光明皇后宮。旧長屋王邸）と二条二坊五坪（藤原麻呂邸）の間の二条大路上の南北両端に掘られた濠状の遺構のうち、藤原麻呂邸南門前から東に二条大路北端に沿って延びる遺構。総延長約五八ｍ。西端の門前から、藤原麻呂の家政機関に関わる木簡が集中して見つかった。

ＳＫ五一〇四（第四室213）　一九六七年

東張り出し部の付け根部分に南面して建つ小子門の南西、東一坊大路西側溝ＳＤ四九五一のすぐ東の路面上にあたる場所で見つかった南北に長い楕円形のゴミ穴。長径二・八ｍ、短径二・三ｍ、深さは〇・七ｍある。